場所　〒502-0812 岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

わいわい、がやがや、みんなで哲学

哲学カフェ de ぎふ

千秋（せんしゅう）まちかど文庫　通信

第163号
2022年2月

運営委員会発行（記録:安藤明弘、編集:中川健史）（主宰:吉田千秋　090-7917-9602　yoshida0@sepia.ocn.ne.jp

第162回哲学カフェ例会（2021,12,9）

≪世の中を明るくするには何が必要か?≫

「いまの日本で明るい話題は野球の大谷選手、将棋の藤井くんなど。全体として活気がなく沈みがち。だが、もう一つ先が見えない。何とかしたいですね。」

＜問題提起＞　吉田千秋（主宰）

•今どのような問題があって、人々を辛い、暗い気持ちにさせているのでしょう。その様な問題を解決して、明るい新しい日本を作るには私たちは何をする必要があるのでしょうか。

•私が講師を務める名古屋哲学セミナーでは、年の初めに毎回、「新年の展望を語る」というテーマで例会を開催しています。その新年の挨拶で、「骨のうたう」や「日本が見えない」で知られ、若くして戦争で亡くなった詩人、竹内浩三の生誕100年の記念碑の記事を話題にしました。特に興味を引かれたのは、その記念碑に記された「生まれてきたから、死ぬまで生きてやるのだ。ただそれだけだ」という文言で、これを選んだのが地元の中高生であったことです。その理由が、「つらくても生きていこうという意志が伝わり」」と背中を押されたようです。戦争に反対しながら、戦争に行って他人を殺さねばならないつらさ、悲しさが、今日の若い人たちの状況と重なり合って見えるのかもしれません。

•昨年の4月に行われた日本財団による意識調査で、相当数の若者が自殺を考えたことがあると回答していて、特に15歳から20代で自殺のリスクが高いという結果が出ています。何としても、若者が希望を持てる社会にしなければなりません。そのカギは、若者を子ども扱いせず、社会の主人公、主権者として成長できる環境を作り出すことが必要です。

•日本社会の風通しの悪さが人々を暗くさせていますが、その根っこにあるのは、権力•政府が国民の疑問に答えず、何を言っても仕方がないという無力感が広まっていることです。その典型が沖縄の民意を無視し続けて新基地建設を続行していることに見られます。加えて今回、公文書の改ざんを指示され自殺した近畿財務局の赤木俊夫さんの妻雅子さんが真相解明を求めて

左…吉田主宰、右…大橋運営委員長

起こした裁判で、国は1億7百万円の賠償金を支払うことで、裁判そのものを終わらせ、事件を完全に封印しようとしています。雅子さんがお金の問題じゃないと憤るのはもっともだと言えます。国の対応に疑問を感じて、批判の声が高まって当然だと思われますが、マスコミに断固として疑惑解明を求める追求の意思が全く感じられません。言論の自由は批判の自由であらねばなりません。過ちは過ちで、その責任は問われねばならないという庶民的な常識が権力者に通じないことは厳しく批判されてしかるべきではないでしょうか。権力の過ちを正すことは世の中を明るくするために不可欠だと思います。

•日本社会が抱える問題の一つに子どもの貧困があります。これが大きな社会問題として意識されないのは、周りの人間に見える様な形で顕在化しにくいからでもあります。貧困を見える化（可視化）する必要があります。女性は非正規雇用を余儀なくされることが少なくありません。一人で子育てするシングルマザーも増えています。子ども食堂などで貧困家庭の生活を食事の

面で支援する取り組みが全国的に拡がりを見せていますが、週に一回の支援では十分と言えません。民間の支援はあくまでも手を貸して弱者の苦痛を少し和らげることでしかありません。貧困問題の根本解決には、政治の取り組みが不可欠です。

•憲法改正の問題では、先の衆院選で勢力を拡大した“維新の会”が今年の参院選の際に、同時に憲法改正の国民投票を実行するよう求めるなど、憲法改正の実現に前のめりになっています。保守勢力の一部が憲法改正に躍起になっていますが、憲法改正が緊急の課題だと考える国民の割合は僅かに3%に過ぎません。気がかりなことは、マスコミは批判的な姿勢を失っていることです。例年の様に元日に新聞各紙の新年の社説を読み比べましたが、残念ながらこれだと思えるようなものはありませんでした。

•年末のコラムで哲学者の鷲田清一氏は政治が国民の心配に冷淡で寄り添う姿勢を持たないことを批判して、「政治の酷薄に抗ってそれを押し返すには、骨太の真っ直ぐな言葉が要る」と言って、言葉の力を活かすように訴えています。私たちに権力はありませんが、言葉があります。しっかりと受け止めて、心がけてゆきたいものです。

意見交流

＊竹内浩三の国家権力に対する反発の姿勢は、かつて反権力、反軍的な言論で知られた、戦前のジャーナリスト桐生悠々それに通ずるものがある。桐生悠々は1933年「関東防空大演習を嗤(わら)う」という社説を書いて軍部を批判した。権力者を嗤えるってことは大事なことである。

＊言論の自由、批判の自由は大切である。しかしそれが間違った方向に向かうと悲劇を生む。女子プロレスラーのハナさんがソーシャルメディアで批判を浴び、自殺した事件がその代表例である。但しこうした事件が言論、批判の自由を制限する口実に使われない様に注意する必要がある。愛知県知事のリコール騒ぎは、表現の自由を制限しようという人たちの行き過ぎた動きだった。

＊批判の自由は極めて重要である。民主主義を活かすも殺すも、批判の自由が保証されるか否かにかかっている。ただソーシャルメディアにおける憂さ晴らしの様なバッシングの横行は遺憾である。個人を誹謗中傷する自由が権利として認められるとは思わないが、権力の批判を自粛するようなことがあってはならない。

＊前大統領のトランプ氏は大統領選の敗北を認めず、不正な選挙で勝利を騙し取られたと主張し続けてきた。ツィッター社は根拠の無い嘘をばら撒き続けているとして、ツィッターの使用からトランプ氏を永久に締め出すことを決めた。誰が何を根拠に他人の主張を述べて好いか悪いかと決めるのか。間違った主張でもそれを表明する自由は尊重されねばならないのではないか。このような判断は非常に難しい。

＊若者の希望の無さが気がかりである。将来に対してさほど期待を持たずに生きている若者が多いってことは異常である。経済的事情で進学が出来ない、やりたいことを諦めねばならないという人もいるだろう。しかし問題は、多くの若者が明るい人生を思い描くことのできない精神的状況にあるってことである。

＊大きく全体の状況だけでなく、身近な個々の現実を見ることも必要。子ども食堂などで子どもを助ける活動をしていた。但し、勘違いの自己満足にならないようにしなければならない。一時的に困難を和らげることはで

きても、生活難を解消する様な根本的な解決にならない。

＊現実主義に徹する必要がある。学校に余り期待することはできない。学校教育で学ぶことの多くは実社会で役立つとは思えない。場所を取って、時間を無駄に使っている。パソコンを全ての子どもに無償供与して、パソコンを使ってやりたい事をやれば、社会で必要なことも多くを学べる。ストレスばかりを生みだし、子ども追い詰めるだけの学校はいらない。

＊社会全体に民主主義が足りない。多くの者がストレスのたまる窮屈な生活を余儀なくされ、自分と異なることをしている者にいらだちを覚えるなど、他人に不寛容になっている。多様性を理解して、違いを受け入れるようにしなければならない。

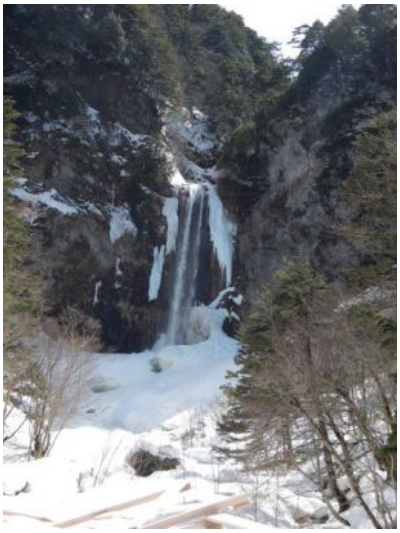
＊子どもが過度に規律を求められている。イジメや虐待は、人間を枠にはめてしっかり管理しようとする教育の反動と見ることもできる。教育は国や社会に役立つ人材作りという考えを改める必要がある。

＊教師は何をしてきたのか。子どもを追い詰める教育の片棒を担いで来たのかもしれない。そう考えると忸怩たる思いがある。

＊貧富の格差が大きくなっている。特に貧の多過ぎることが問題である。親の面倒を見るために学校に行けない子どももいるらしい。やりがいを感じない仕事をするってことが珍しくない。ただ生活のために働かなければならないから働く、ということを多くの人が当たり前の様に受け入れてきた。多くの人は結果として人生の大半を楽しくないことをして過ごす。私はキャリアコンサルタントをしていて、職探しをする人たちが満足感を得られる様な仕事を見つけられる様に助言している。会社は会社で、利益追求を目的としていても、満足感を得られる人たちに働いて貰った方が目的実現に適っている。

＊学校も会社もやっていることを楽しむという考えが欠けていた。学校は単純な基準で人の学力を数値化して選別してそれを教育と言う。社会では個を犠牲にして会社のために奉仕することを求められる。個を主張しようとすれば異端扱いされ排除される。

＊そう一概には言えない。ずっと以前はそういう状況があったかもしれない。しかし時代は変わった。学校も



色々だし、教師も色々である。今の教師の多くは個性を大切にしようと努めている。

＊学校は「多様性を重んじる、個性を重んじる」というモットーを掲げ、子どもを新しい形の枠に嵌める教育していないか。道具や教材だけを与え、後は子どもに好きにさせるだけでいい。教師の役目はそっと見守ることである。

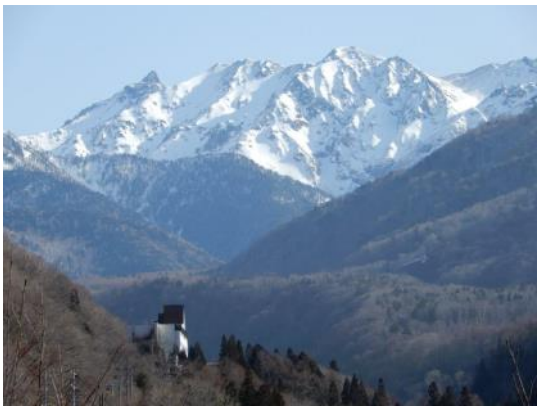
＊孫を見ていて気が付くことがある。今、学校はコロナ禍のために、子どもの行動を厳しく管理する傾向を強めている。感染防止のためかもしれないが、余りに事細かにルールを決めて守らせようとする。沢山ルールがある事を子どもも当たり前と思っていて、ほとんど無条件に受け入れる。逆に今の子どもは休みに課題を出さず、自主勉強と言われると何をしていいか分からず困惑するばかり。

＊私の娘は、自主性を重んじる中学で、戸惑って、引きこもりになって、学校を普通に卒業できなかった過去があって、自分の子どもにドリルをさせている。運動はよく出来る。駆けっこが得意で、走るのが速い。

＊用事があって銀行へ行って、待っている時間に、店の壁に貼ってある接待のモットーの文言が目に入った。そこには「“ハイ、分かりました”ではない、“ハイ、直ぐします”である」と書かれていた。店舗で働く行員たちの間に、重苦しい緊張感の様な嫌な雰囲気は感じられなかったが、その文言に事細かく行員の振る舞いを管理しようとする姿勢が垣間見えて、違和感を覚えた。多分、どこでも似た様なことをやっているのではないか。こんな風では働くことを楽しむ何てことは期待できない。

意見交流の最後に 吉田 千秋

•皆それぞれ異なる人生経験を持っていて、それに応じて立場も異なります。その異なる立場から昔のことが見えて来て興味深いと思います。過去の個々の経験は忘れてはいけない重要なことで、また何が大切で何が大切で無いとか単純に比較できないことでもあります。
•大阪の下町で生まれ育ったボクが小学校へ通ったのは敗戦後の物資が乏しい時代でした。貧しくて子どもが一杯いて、中学校では一クラスの生徒数は60人余り、14クラスありました。今では想像もできない数ですが、貧しい者同士が助け合ってやって行くのが当たり前のことでした。想い返せば、教師は鷹揚に構えていて余裕があって、生徒はのんびりしていて比較的自由でした。現在の学校教育における根本的問題は、教師が上から管理され縛られてしまっていることに思われます。
•労働運動についてはかつて、小さな人たちの力を結集して社会の改革を促す大きな役割をしていました。いまの労働組合の多くは、社会運動の性格を失って、存在意義を失いつつあります。この問題も含め、いったいどう



すればいいのでしょうか。個人で出来ることには限界がありますが、まずそれぞれの分野で自分のできることをすることではないでしょうか。その様な取り組みを幾つかつなげて、できるだけ大きな運動にすることです。自分の小さな世界を変えることから出発して、大きな世界を変えることにつなげる。成果がすぐにでなくても、信じてやり続けることが大切なように思われます。

＜前号感想、例会感想、意見、便りなど＞

○〈「岐阜のカフェ」の通信ありがとうございました♪〉

コロナ禍で交流や議論の場が制約され、ネットで匿名で過剰な非難めいた書き込みが可能な時代、厄介で重く悲しい出来事が社会に溢れている。

ふと思います。楽しい魅力的な人間のあり方って何だろう。自分の存在で可能なことは何だろうと。

生きていて楽しいと思えること。人間で良かったと思えるような歌を歌うこと。長く歌い継がれる様な歌をいつか作ることです。　(koei ishi)

○＜将来に不安がないように＞

最近、若者の雇用に行政も力を入れていますね。コロナによる社会構造の変化もこれから衰退または発展する可能性のある分野が鮮明になってきたように思います。若い人たちはどのように考え受け止めているのか気になるところです。子育て世代も高齢者も子供を守るために一生懸命稼ぎたいと思っているし、

若者は当然働いて自立したいと思っているところが悩ましいと感じています。

世代に関係なく一生懸命生きている。社会に貢献していなくても迷惑をかけないようにただただ生きている。そんな気がします。やはり、将来に不安がないことが幸せなのではないでしょうか？　暗いなぁと感じることは多いけれど何か光を見つけたいものです。心が洗われるようなものに出会いたいなぁ。心が純粋じゃないと出会えないかなぁ。　(T•U)

○＜一体、いつからこんな世の中に＞

例えば、死刑になりたくて、複数の人を殺そうと思ったとか、自殺者の増加も。近年こういった摩訶不思議な事件が多発している。その背景には孤独と孤立が垣間見られる。

話は飛躍するが、哀しいかな人間は、半世紀も先のことを見据えて、今何をすべきか、してはならないかを考えるのは、不可能に近い。ついつい目先のことに陥りがちだ。自分が高齢になり、過去を自分の目で見てきてつくづくそう思うに至った。高度経済成長期に、イッキに建てられた建造物やインフラ等は当然ながら、すべてイッキに老朽化した。経済が追い付いていかなくなったのは、今から思うと至極当然と思える。聖人賢者ではない人間の限界だろう。
地球のどこかに生まれ、生きて、必ず死する。どこから

来て、どこへ行くのかも分からない。孤独を抱えた人間存在。哲学とは、難しそうな学問だけれど、何のことはない。そんな多様な人間の集合体のあるべき姿、生き方を模索する学問なのではないだろうか。完璧な答えは見つからない。宗教に答えを見つけようとする気持ちも分かる様な気がする。

―そんなに急いでどこ行くの―　かつて、そういうフレーズの言葉が流行った。基本的な生活の見直しがこのコロナ禍のなかで問われているような気がしてならない。　(hira sumi)

○＜「世の中」あれこれ＞

1. 世の中とはいっても、なかなかすぐには見いだせないものが増えつつあります。長い歴史を見るなんて学校の社会科の授業は「暗記科目」だったよな、などと。 教育だって様々で、嘗ては富裕層（現代的言葉に）のものでした。 しかし、今では無償化を高等教育まで視野に入っています。ドイツ、フランスは普通です。その方法はさまざまなのですが、ここで一句。「教えるとはともに希望を語ること。学ぶとは心に誠実を刻むこと。」フランス、レジスタンス作家・詩人の言葉はどうでしょう。まあ、いろいろ積もる話をして、とも難儀しましょう。

2. 苦労は買ってでもしろと言われましたが、色々やってみるとできちゃいますが、できないこともまあまあ。人類は色々と科学や協同作業やらと克服してきています。そのおこぼれを分かち合うことですか。

3. ほどほどの距離で。プライバシーであまり立ち入ってはいけませんが、気配りと仲良しこよしのネイバーズでは。同じ空気、水と太陽を浴びています。何かあればすぐに駆け付けられます。ぽつんと一軒家ではないコミュニティーがありますから。嘗て、経済の文献で「総合的労働者の集団の出現」を見通しています。世の中を変えていくもとになるのでは。　(ひで)

○＜世の中の変化に応じた対応を＞

仏陀が世は無常と説いたように、世の中の状況、情勢が刻々と変化していくのは自明です。したがって世の中を良くしていくには、世の中の変化に対応した個々人が、少なくても希望が持てそうな方向への変化が求められますし、それがなくてはなにも始まらないと感じます。

しかし昨年の選挙結果を見ると、日本人の多くは変化することを拒絶したように自分は思います。そのため今後起こりえる事で一番可能性が高いのは、外的要因に

よる強制的な変化、あるいはもっと激しく恐ろしい外的要因による既存の制度の強制終了かもしれません。最近は世の中をどうするのかと考えるより強制終了が起きた時どう行動したらいいのかを考えることが頭の中を占領しています。　(たなか)

○＜世界中に溢れる？「国を出たい若者」＞

私はここ10年余り、自分の国を脱出したいと願望する若者にたくさん出会い、普通の庶民や若者が大量に欧米に流れ出ていることを実感した。そして、その背景に、世界のかなり広い範囲が日本以上に深刻な経済状況下にあること、国境の壁が「低くなり」移動が容易になったこと、などが挙げられる。

こうした人口流動に関して、フィリピンではほとんどの家族にoversea workerや移民した親戚がいる。これらに対する人々の受け止めは賛否が混じるものの、総じて否定的ではなかった。彼らは厳しいことと感じながらも、前向きで人生も社会も楽観的にみていた。

そこで思い当たることは、フィリピンの社会が上り坂で、今は暮らしが大変でも、目の前に成功事例がたくさんあり、希望を持てる、という見方だ。片や我々日本の社会はその逆、各種の経済指標の悪化以上に若者達の希望はしぼみ、悲観が膨らんでしまったのではないか、となる。さらに、かつては大半がフィリピン的であった世界に、今や日本的状況が各地で広く加わって、悲観論の若者や国を信頼できなくなった若者が急増、となる。

本来資本主義は理論上市場原理を通して資源を最適分配するはずだが、世界の人口分布から見れば、甚だしく偏った富の地域分配が起こり、世界を混乱に落としている。若者問題の大本もそこにあるのではないか。

（フィリピンウオッチャー）

＜大阪だより　その2＞　「最初の勝利判決」

2012年1月、私が大阪の弁護士になった時、大阪は「公務員叩き」にあふれていました。大阪維新の会の橋下徹市長は、大阪に広がる貧困と格差を「税金を食い物にする公務員」への憎しみに転化させようと煽っていました。テレビ人気で当選した橋下市長が、民意はすべて自分にあるとして、「民意を無視する者は去れ！」と市職員を脅す一方で、従順になった市職員に「みなさんは国民に対して命令する立場だ」と言って市民と敵対させようとしました。

実際に当時の大阪は、子どもの貧困率21%（全国平均13%）、非正規労働者率45%（全国平均38%）、大阪市民の18人に1人が生活保護受給という状況で、大阪の人たちの「首都東京に次ぐ経済都市の大阪のはずが…」との焦りから現状打開を求めていました。そこに、明快な敵役を作り、敵を叩いて競争に勝ち抜く新自由主義の改革が、現状打開の方法だと思われたのだと思います。どんどん激しくなる生き残り競争は、いつか自分が転落した時に「自己責任」で切り捨てられるような社会で良いのかと考える余裕もなく。

私は市民のために働くことを誇りとする公務員の弁護団員として活動しました。組合事務所事件の大阪地裁判決は、自治体労働組合における庁舎内の組合事務所の必要性や橋下市長の組合嫌悪の意思を実態に即して認定し、団結権（憲法28条）の趣旨から、維新多数の議会で成立した労使関係条例の本件への適用は裁量権濫用の違法判断を出しました。しかし、高裁判決ではひっくり返されました。しかし思想調査アンケート事件では、地裁・高裁で労働基本権とプライバシー権侵害で違法と認められ、業務命令で回答拒否は処分すると市職員を脅したアンケート調査を止めることができました。

橋下市長は、自分自身の責任を一切語らず、平然とウソも多く発信していたので、きちんと事実を見極めれば勝訴できるのですが、維新の勢いに乗った大量宣に大阪中が振り回されていました。　　（宮本亜紀）

＜世界一周貧乏旅　その31＞　「地獄の門を閉鎖せよ」

明けましておめでとうございます。

ここで外国の記事を書き続けてずいぶん経ち、数えたら今回で31回目、もう少しで3年経とうとしているようでほんの少しびっくりしました。

さて、今回の国へは僕は行ったことがないのですが、旅するバックパッカー達からよく耳にし、僕自身も行きたいなと思いながら、旅程の都合上行くことのできなかったトルクメニスタンの地獄の門について紹介します。

地獄の門とは、トルクメニスタンの首都アシガバードの北約260キロメートルのカラクム砂漠の中ほどにある、直径69メートル、深さ30メートルの巨大な穴のことです。この穴がどうして地獄の門などという禍々しい名前が付いているのかというと、実はこの穴は天然ガス田であり、穴の内部全体で火が着いているため、広大な

砂漠の真ん中にずどんと巨大な燃える穴が現れるのです。火山の噴火口を思わせるその穴は、だだっ広い砂漠に突然開いた地獄の入り口と形容したくもなるので

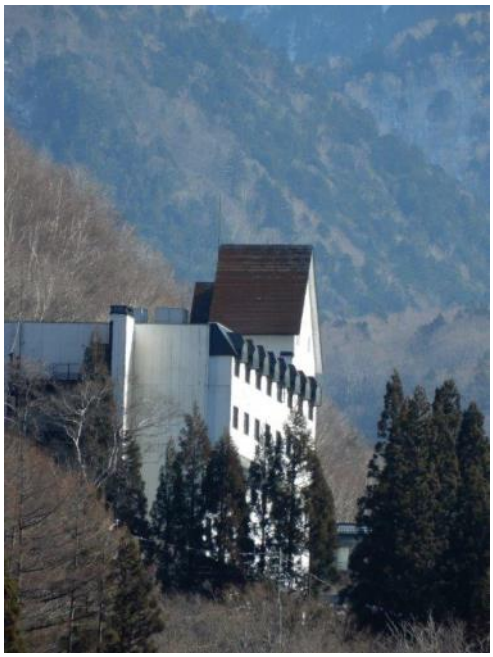
しょう。

この穴は自然にできたものではなく、1971年に採掘工事の際の崩落事故によりできたもので、穴から放出される有毒ガスが近隣の町に及ぶ危険性があったため、ガスを燃え尽きさせるために当時の技術者達が火をつけたことが地獄の門の誕生のきっかけでした。数週間以内にガスが燃え尽きると予想されていたものの、50年経過した今日に至ってもなお燃え続けています。

しかし2022年1月のニュースで、「地獄の門を閉鎖せよ」と大統領からの指示があったと伝えられました。大統領は、地獄の門が燃え続けていることによって、地域の生態系と住民の健康に悪影響を及ぼしていると指摘。また、国の繁栄のために利益を得ることができるはずの天然ガスを消費していると警告したそうです。今後地獄の門は閉鎖に向けて専門家達が取り組んでいくとのことなので、いずれは火は消され穴も埋められてしまうのでしょう。

自由に海外旅行ができるようになればぜひ訪れたい国の一つではありますが、コロナ終息と穴の閉鎖、現状の世界のコロナ感染状況を考えれば、どちらかといえば穴の閉鎖の方が見通しが立ちそうな気がしてしまうのが悔しいです。

（カモノハシタニ）



（本文とは関係ありません）

＜この一冊＞　中島　京子著　『やさしい猫』(中央公論社 2021)

表題のやさしい猫とは、猫に親ネズミを食べられた子ネズミたちが困って猫に抗議したので、猫が親代わりになって子ネズミたちを育てることにしたというスリランカの民話に基づいている。その含意は強い力を持ったものは力を持たないものにやさしくするべきだということだろう。そうした含意が通用しないところがこの日本にはある、ということを子どもにもわかるやさしい語り口で語ったのがこの小説である。

ミユキの娘、高校生のマヤは自分の異父弟に母・ミユキと再婚相手のクマさんとのなれそめを語って聞かせるという設定だが、クマさんが日本人でなかったことから話は大きく展開する。本名は落語の＜寿限無＞ばりの長い長い名前の、通称クマさんは、スリランカ出身である。就労ビザを持って日本に働きに来ていたが、会社が倒産し、次の職場を探しているうちにビザがきれてしまう。相談のために訪れた入管事務所の門前でクマさんは逮捕され、不法滞在者として入管に収容されてしまった。

そこでの生活は名古屋入管で無残にも命を奪われたウイシュマさんとぴったり重なるが、それを知ったミユキさんは一か八かのかけにでるのである。続きは本書に任せるとして、国家権力の名において非人道的な

扱いをすることが許されているとでもいうように、入管は外国人に対して強権的にふるまう。それは何故か、彼ら彼女らがアジア人だからか、彼ら彼女らが不法滞在者だからか。彼ら彼女らの日本語能力が十分でないからか、彼ら彼女らが日本文化を理解しないからか…入管のことはよく知らない人という人にも是非お勧めしたい一冊である。

（寿限無）

哲学カフェ　第27期(2022年前半)例会予定

＊毎月第2木曜日、午後7:00～9:00 ふれあいスペース

⇒ コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。連絡下さい。

第163回例会 1月13日(木)	「世の中を明るくするには何が必要か？」 ＊コロナ禍2年。慣れるどころか、第6波も心配で、疲れだけが蓄積するこの頃。 ＊気候危機、核兵器問題、加えて改憲勢力の台頭。希望をどこに見出すのか。 **終了しました**
第164回例会 2月10日(木)	「日本は民主主義国家なのですか？」 ＊バイデン大統領主催の「民主主義サミット」に、中国は反発。日本はもちろん参加 ＊でも、「わが政府一党独裁似たような」状況あり。民主主義と専制、あやしい区別 **休止します**
第165回例会 3月10日(木)	「しのびよる老い、それにどう向き合うのか？」 ＊日本は言わずと知れた高齢社会。健康年令も世界一。政治も経済も老人王国。 ＊だが、老人当人の多くはたくさんの心配を持っている。どう終活していくのか。
第166回例会 4月14日(木)	「天皇制・皇室のいま、これからどうするの？」 ＊昨年メディアがむやみに取り上げた真子さん結婚問題。放っておいたら良いのに。 ＊肝心の女性天皇や女性宮家の問題については、またもや放置。どうするのかね。
第167回例会 5月12日(木)	→　希望テーマお寄せ下さい。
第168回例会 6月9日(木)	同上
第169回例会 7月10日(日)	同上 →創立14周年記念行事を3年ぶりに開催めざします。

哲学カフェの運営資金の協力 も、よろしくお願いします。
口座記号・口座番号 00810 1 142912
加入者名　哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫
「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !!
http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェdeぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願います。友人・知人に拡散いただければ幸いです。

わいわいがやがや　アラカルト

★近年、大学の講義をやめたので、若者の現状がリアルに感じ取れず、様々なニュースにふれるたびに心配だけが増してくる。昨年10月末の総選挙当日、「死刑判決を受けたかった」と、電車内でナイフを振り回してサラダ油をまいたハロウイン用の服装をした青年。

★そして新年に入って、大学入学共通テストの受験会場前と、受験会場内で起きた異様な二つの「事件」。一つは、来年東大医学部を受験予定の高校2年生が、受験生と付き添いの親を切りつけた。思うように成績が上がらず、事件を起こして死のうとしたということらしい。

★もう一つは、同じ日の大阪で、大学1年生の受験生が、「世界史B」の試験内容をスマホで画像送信し、解答を返信してもらう不正を行った。送信相手は「家庭教師」紹介サイトの現役大学生で、共通テスト本番の内容とは知らずに解答を送信したらしい。

★それにしても、これらの若者3人の行為は理解しがたいものである。先の二人は、仕事や人間関係が絶たれたのと、志望学部への望みがかなわなくなったというのが行為の動機らしい。だが、自分だけではなく、なぜ他人まで巻き込んで殺傷しなければならないのか、よくわからない。

★3人目の大学1年生は、どうやら今の大学が不満でよりよい大学へ移りたいらしかった。それならすなおに勉強し直して努力すればよいのに、なぜ「家庭教師に雇ってあげる」というような仕方で、用意周到に卑劣な手段を用いる必要があったのか。

★そこに共通するのは、他の人のことは眼中になく、自分勝手にしか考えられない、心の歪み、暗闇ではなかろうか。こういう状況に追いつめた事情は何だったのか。様々な不安、苦労、心配、葛藤を抱えながら必死に生きている若者はたくさんいるだろうに。何とか若者が明るく行きていけるように願うばかりである。　（吉田千秋）